



後世に残したい海

前野 美弥次

聞き手・濱下 真太郎 山本 希望 (石川県立飯田高等学校2年)

蛸島漁港

自己紹介

生まれは正院町川尻で、両親と兄弟は男が4人女が1人、私が一番下です。今、両親は亡くなったけど、兄弟5人はまだ健在ですね。現在は蛸島^{たこじま}に住んでいます。今の家族は夫婦だけです。子供は2人いますけど、長女も長男も結婚していて、長女は子供2人、長男も子供2人。私の孫とすれば4人おる。

私は飯田高校に行とったけど、途中でやめて、専門学校行きました。専門学校卒業後、船に乗りたかったので、日本郵船株式会社に就職しました。その会社は輸出入関係の仕事。そこで仕事しとってんけど、うちの父ちゃんが漁師しとって、「お前、高校も途中でやめて、自分の好きなことやったから、今度は俺の言うことを聞いてくれ」って。父ちゃんが漁協の役員しとったもんで、「今漁業が困とるから、漁

協に来てくれんか」って言われて、蛸島の漁業協同組合（現・石川県漁業協同組合ず支所）に入社して、そこで定年退職まで働いたということです。

漁協の仕組み

漁協組合ってのは、漁師の人が朝、魚を捕ってくる。そして、漁師の捕ってきた魚をまず魚屋さんに売る。魚屋さんに売ったお金を漁協が回収する。その集めてきたお金を今度は漁師さん達に分配する。そういう仕事が漁協組合。「おらんとこの魚はなんぼやったか」と漁師が直接聞きに行くでなく、漁協組合が代わりにその売り上げを渡されて、漁協が漁師に渡すと。仲介役みたいなもんや。

漁師の年代は60代が多いね。40代とかは少ないよ。インドネシアからの研修生を受け入れて漁船に乗せたのは今年で13年目じゃないかな。一番先に乗せたのが小型の底引

き網船で5名。そのあと小型のイカ釣り船にも乗せてくださ
いってことで2名乗せたんかな。そのあとに今度定置網船、
そのあと巻き網船にも乗せるようになりました。今じゃ貴重
な人員やね。

主な漁法

蛸島の主な漁法は、「巻網」で一番大きな水揚げしたわ。
巻網ってのは、船の機械で網を巻いて捕る方法。当時は、サ
バとアジを大量に捕ってん。その次に、定置網漁。んで、底
引き網。あと、刺し網。刺し網てがいっぱい種類ある。なん
でも引っ掛けるさかいに、「雑刺し網」言いん。あとそれ以
外でいったら、専用の刺し網。専用てが、魚の大きさによっ
て網の大きさを変えていきん。その季節によって捕れる魚の
専用の刺し網なんかを掛けるわけや。

遠洋漁業と沖合漁業を担当する漁師さんは決まっています、
漁法も違う。当然ながら、遠洋・近海という漁を操業する区
域もそれぞれ決まっている。昔は、遠洋漁業で外国の方に行
つとったりしてんけどな。今じゃほとんど沖合やな。なん
で遠洋漁業が少なくなったかという、まず200海里制度
（排他的経済水域）があって、それで遠くまで行けなくな
ったのが一番の原因やな。12海里の日本の領海があって
12海里以上になったら主権が及ばなくなるとる。2、3年
前から、中国とか韓国の船が岩手県や北海道の沖合でサンマ
を捕って、日本のサンマ漁船がサンマとれんくなつたて聞
いたことないか？ 12海里までなら、海上保安庁は逮捕す
ることができるげんけど、12海里の外だから逮捕出来ない。
そこから200海里までは主張ができるだけ。だから、日本
では食べない魚を食べる国があるから、その国の漁船が、お
金になるからと密漁することがあったわけや。

前野さんの仕事

蛸島漁協組合から石川県漁協ず支所の統括参事になつたのは合併した平成14年ですね。統括参事ってのは、職員をまとめて、漁協組合の育成をするって感じですね。漁師さんを引っ張ってかんならんし、校長先生みたいな感じや。漁協組合ってのは、理事がいて一般に「役員」て言いん。でも経営には直接携わらない。なんかあった時にみんなが集まって会議をする時、業務を全てつかさどるのが「参事」。

石川県では、ここ珠洲市が一番組合員の数が多いです。約1300名ほどおるはず。組合員っていうのは、正組合員と準組合員というのがおります。年間90日以上漁労に従事した人が正組合員です。30日以上が準組合員といひます。その差は何かと言うと、漁協で総会が開かれるんですけども、そこで発言権があるかないか。正組合員は、発言権があ



(上) 漁に使っている網 (中) 前野さん愛用の包丁 (下) 魚を分別する機械

るし、理事にもなれます。準組合員は発言権を持ちません。1年に1回、資格審査委員会が漁協であります。たとえば、歳をとって漁に行けないとか病気で行けないとか、そういう人を審査委員会で準組合員に落とす審査をします。それから、漁師になりたい人。そういう人たちはどうやって漁師になるかという、人の船に乗らせてもらうんや。それが組合員の一員として漁師になるのに一番手取り早いわな。

おさかなマイスターとは

おさかなマイスターとは結局は、“野菜ソムリエのお魚版”やな。そんなみたいな感じやと思っと思ってくれればいいわ。平成2年の9月から12月の始めまで東京の築地に1週間に



おさかなマイスターとして子供たちに魚の解説をする前野さん

1回、講義を受けに通うて、平成22年の1月30日に免許証来たわ。日本で、私が103番目やったかな。その第1番が、かの有名な「さかなクン」や。日本海側の魚なら知っとるけど、試験は太平洋側の魚も出るもんやから難しかったわ。魚偏の漢字はね、覚えんでも、自然と入ってくる。魚って当て字も多いしな。1匹の魚に名前が3つも4つもあるしな。

これをとったきっかけというのはね、食育の一環で、学校の子供たちが漁協見学に来てんわいね。その時にね、私が受け入れた時はね、保育所の幼い子供たちにお魚のことをたくさん教えてあげようと思ったのがきっかけです。「魚の視力はどんだけや」とかそんなが教えるわけですよ。珠洲で生まれたからには、よそで魚の名前が言えせんなんて恥ずかしいことは言えんげんぞ。

魚と私たちの関わり

魚って旬があるからいいと思うげん。それがだんだん旬がないようになりつつあるけど。なんでって言ったら、養殖が増えてきたから。養殖は出荷調整しながら出せるでしょ。まだ完璧にはなっとらんけど。だけどこの辺だと養殖は盛んでもないし、魚は旬があるから美味しいんやって。冬はプリ

が美味しいやろ？ 旬の時に旬の魚食べるのが一番美味しいんやって。食べ方はその地区の食べ方、それがいいと思います。

漁師さんは魚の美味しい食べ方をたくさん知っとるよ。高い魚じゃなくてもみんなが自分で家に持って帰るのがいい魚。高級な魚は出荷すりんよ。漁協の職員なんかは安くて美味しい魚を知っとりん。勉強してきたから100円の鯛で1000円の鯛よりも美味しく食べる食べ方を知っとるから。だから魚を勉強すると面白いよ。鮮度の見分け方は、一般の方が見るときはエラの色が赤いの。目の透き通ったもの。肌のツヤがあるもの。

今、「お魚捌き方教室」っていう体験イベントを頼まれて講師をしています。年に4回やっています。なんで4回かって言うと旬があるから、春夏秋冬の旬の魚をメインでやりましようって。集まっとる人は30代の釣り好きな男女、15人くらいかな？

魚を捌く包丁は、寿司屋さんとか板前さんは2、3本ぐらい使っとるやろうな。商売しとる人なら包丁使い分けとる。そうしないと腕が疲れてくる。漁師さんは1本やね。私なんかも包丁変えんわ。

毒魚について

最近、三崎地区の中小高生を合わせた地引網大会で魚の説明をしてきました。魚の説明よりも危険な魚を教えてくださいました。

例えば、毒を持っているのがヒョウモンダコ。太平洋側だと房総半島まで来ています。日本海側だと若狭湾まで来ています。そういうものは絶対に触らない。ヒョウモンダコは今まで沖縄までしかおらんかってん。それがこうやって流れてくるっていうのは温暖化が進んできたってことでしょね。前は8月のお盆以降涼しくなったらクラゲが来ないとかね。今、定置網なんかもクラゲが入って仕事にならんっていつて定置網あげたところもあるよ。

この辺で一番の毒魚はフグですよ。フグの毒は内蔵にあるもので、それはきちんと法律があつて鍵のかかる袋に入れて専門の業者が持っていけます。一般人がフグを自分で捌いて食べる時は自己責任ですね。漁師は自分で食べるとるがいね。でも調理・加工品を販売するときは講習に行つて届け出をしないとだめですね。

フグの毒が体内に入ると死んでしまいますね。傷口につくぐらいなら大丈夫ですよ。綺麗に洗えばなんとない。傷についたってそこから入るわけでもないし。

私はフグを捌いて食べますけど。一応、私もフグの調理師の資格は持つとるし。漁協だつてフグ売るやろ。丸投げで売るのがほとんどねんけど、そこで1人ぐらい資格持つとらにやつて思つて私がフグの調理師の資格とつてんけど。漁協の職員で資格持つとるのは、まあ石川県で俺ぐらいかもしれない。

あと、毒魚で言えばアカエイ。アカエイは長靴の上からも刺すし、頭を押さえとつても尻尾が360度回るから刺されるから、あいつは気をつけなといけませんよ。

応急処置するときは、魚の毒は大体、タンパク系の毒なんですよ。タンパク系の毒やから冷やすんじゃなくて温める。40度から60度のお湯でやけどせん程度に30分から1時間ほど温める。そうすると毒が溶けて解毒になって大丈夫。

海の今と昔

今の海と昔の海の違いは、捕れる魚が全く違つてきた。一般に言われる温暖化が進んできて。一番顕著に違つるのは魚でいうとサワラですね。太平洋、瀬戸内海でしか捕れてなかつたのがここ7、8年前からここ石川県で大量に捕れるようになりました。暖かくなつたってことですね。

昔は魚がいっぱいおつた。今はおらんがになつた。温暖化の影響もあるけれど、機械化、技術の向上、乱獲、多分そ

のせいやと思います。漁法が良くなつたと機械が良くなつたんで、魚を根こそぎ捕つた仕返しが今来たつて格好じゃないかな。

でも、まだこの辺はいいげんよ。養殖せんでも食つてけるから。太平洋側は養殖なしで食つてけんから養殖に熱をいれとる。だから養殖するための稚魚を捕るための競争するやろ。船のGPSプロッター(*1)つてやつはほんとに性能いいし海の底でもほとんどピンポイントで網入れていかれるから。昔はそうじゃなかつた。「やまめ」つて言葉があるんけど、昔はその機械がない時、山を見るげん。「灯台と山の松の木の重なつたところ。そのまま真つ直ぐ沖行つてこちらの方の松の木の見えたとこに、いいポイントがある」という具合に、山と山を見るつてつて「やまめ」つていうげん。そうしないと漁場がわからなんだ。今はそうじゃない。機械をうまく使いこなす人が漁をする。ピンポイントで漁場に行ける。昔はカツオ釣りに行くとカツオドリ(*2)を見つけることが早い人が漁ができた。だから視力のいい人乗せたり、マグロ獲るためにヘリコプターを飛ばしてマグロの群れを発見して船を向かわせたりしてん。それだけ魚は金になるもんやから。ヘリコプターチャーターして飛ばすことなんてなんでもない。でもそれじゃあ乱獲になるからやめたつていう風に聞いとる。だから昔は魚おつてんよ。

(*1) GPSプロッター：GPSの位置情報を受信して、航跡、潮流グラフ、気象情報などの情報を把握し記録・表示出来る魚群探知機

(*2) カツオドリ：カツオに追われて海面近くに浮き上がった小魚を狙い群がる鳥。カツオの群を探す目印になる。これが由来となり正式和名が「カツオドリ」である鳥(ペリカン目カツオドリ科カツオドリ属)もいる。

資源保護の取り組み

資源保護の取り組みや里山里海に対しては二つの取り組みを行っています。

一つは、青壮年部が主体になつて県の森に樺の木を植えて何年か下草刈りをしたことがあります。山の方に出向いて下草刈りもするし、植林もしてきました。「海は山から川から」つて標語がある通り、山の腐葉土や川からの養分が植物プランクトンを育み、海の生態系にすべく貢献しとる。特に海藻とか牡蠣なんかにはすべく貢献しとることは顕著に現れとる。

もう一つは、資源管理型漁業つていうことで漁獲制限をしています。これはハタハタに限つてやけど、1隻200箱までとする漁獲制限、休漁日を多くして海を休ませる休漁規制、「網の目合い」制限もしています。「網の目合い」制限つて言うのは、あんまり小さい網の目を使うと小さい魚まで捕つてしまうことになるんで、それを逃がすために大きめの網目のものを使うことを決めています。そういうことを漁師さんが自主的に決めて、資源管理をしています。当然禁漁区

も作っています。それを東京の大会（全国青年・女性漁業者交流大会（平成23年度））で発表して当時の農林水産大臣賞をもらいました。

今後の目標

これからは、資源保護の取り組みを継続してやっていくのが一番いいと思いますけども、植林のほうは、ほとんどボランティアでやってきたんだけど、そればかりやと続かんげんね。一部の人ばかりボランティアにでたりすると「なんでオラばかり」ってなるげん。それは本当はダメねけど自然とそんなんになって廃れてきたっていうのが現状。機会がないと再度チャレンジってなかなか難しいと思います。だけどそれを実践したことが、禁漁とか資源管理型漁業につながっていて、そっちは今も実践しているしこれからも続いていくと思います。

今後の目標は、今のような協力ができる範囲はやっていきたいと思います。子供達への指導や捌き方教室も継続して行けたらと思います。資源管理の他に、1年に最低2回ぐらい海岸清掃をやっとるよ。清掃は漁師さんもやっとるし、沖の方で採れたゴミの持ち帰り運動もしていますよ。そんな活動をこれからも続けていきたいですね。

[取材日：平成28年8月2日・10月4日]

PROFILE

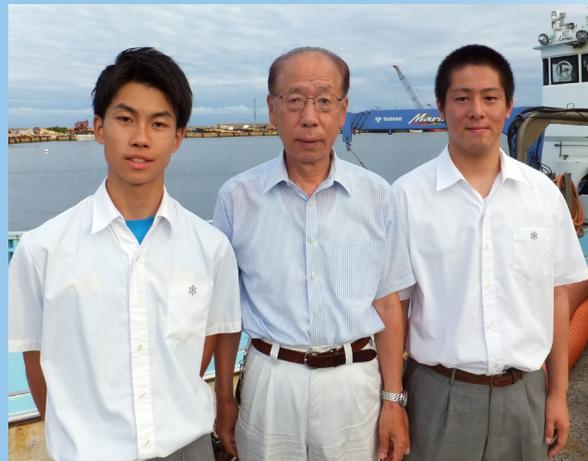
前野 美弥次 まえの みねじ

昭和27年4月9日・64歳
石川県小型いかつり協会事務局長

日本郵船を途中退職後、蛸島漁協に長年勤務した。北陸初の「おさかなマイスター」に認定され、魚に限らず知識は豊富である。経験を活かし地元蛸島漁協でのセリの見学の受け入れや、珠洲でとれる魚種のレクチャー等の「おさかなワークショップ」を開催しており、食育の推進にも携わっている。また、資源保護の取り組みや能登の里山里海のこれからのための講義なども行っている。



● 取材を終えての感想 ●



正直、聞き書き研修は大変でした。インタビューはとても緊張しましたが、インタビューをさせていただいた前野さんは親しみやすい人で、僕がした質問に丁寧に答えてくださってとても楽しい時間でした。特に驚いたことはヒョウモンダコが近場まで来ていることでした。

普段から目にしている魚の美味しい食べ方や毒魚のことなど日頃の生活で役に立つことをたくさん教えてもらいました。

何度かインタビューをして気づいたことがありました。それは僕も前野さんと同じでこの珠洲の海が好きということです。前野さんの話には海の魅力がたくさん詰まっていてこの作品集は海の魅力を知ることができるものになっています。

名人の前野さん、また、この聞き書き研修を勧めてくれた先生と聞き書きの先生方に深く感謝しています。ありがとうございました。

(濱下 真太郎 写真：右)

里山里海の研修に参加して「聞き書き」というものを初めて体験しました。今回、取材をさせていただいた名人の前野さんはとても優しくインタビューに答えてくれる人でした。海のことや自分の持っている資格、さらには漁協関連の組織について詳しく話してくださいました。

それらの話を録音したものを一言一句書き起こして文章作成をするのはとても大変でした。しかし、人の話を伝えるということの難しさと大切さを学ぶことが出来ました。

学校の先生に勧められて参加した聞き書き研修会ですが、自分にとって、とても貴重な体験になりました。この聞き書き研修会で少しは文章力がついたと思うので、これからの学校生活に活かしていきたいです。1人でも多くの人にこの作品集を読んでもらいたいです。関わってくださった先生方、ありがとうございました。

(山本 希望 写真：左)